

北岳

2011年6月19日 リーダー:伊藤松雄

◀北岳山頂にて

予想が残念ながら的中し、「どうしよう」と色々な心配事が頭をよぎりました。今歩いて来たコースと岡本さんの経験なら大丈夫だと判断し、1人下山をみとめることにしました。下山の岡本さんの姿を見ていると「俺の判断は間違っていなかったのか、無理してでも登らすべきではなかったのか」と、リーダーとしての判断の難しさをいつも思いしらされます。そんなことを考えながら登っていくと、白い雪の川が現われました。日本三大雪渓のひとつ大樺沢の大雪渓です。(白馬岳の大雪渓、針ノ木岳の大雪渓) 例年より雪が少なく、途中に何本かのクレバス(雪の割れ目)があって、危険を感じさせられます。ものの15分くらいの登りだったでしょうか、二股到着です。時計の針は10時を指していました。この二股から今宵の宿、白根御池の小屋までは30分の道のり。

風速30メートルの北岳山行記

メンバー

伊藤、伊藤(典)、伊藤(ユ)、岡本(八)、市川、久保谷、佐藤(き)、松浦
7月1日(金)春日部→大宮→新宿→(夜行バス)→天竺閣(仮眠)
2日(土)天竺閣(乗合いバス)→広河原…二股…白根御池小屋(泊)
3日(日)白根御池小屋…草滑り…肩の小屋…北岳山頂…北岳山荘…間ノ岳…北岳山荘
伊藤組(キタダケ草散策)
4日(月)北岳山荘…トラバース(撤退)…北岳山荘(再挑戦)…八本歯のコール…大樺沢(大雪渓)…広河原→甲府→立川→西国分寺→(武蔵浦和→大宮)→南越谷→帰宅

北岳にしか咲かない純白のキタダケ草、梅雨の時期にしか見られない貴品ある高山植物です。そんな花を見たいという思いで遊友メンバー8名は、(当初は9名だったのですが)出発前日、ジリジリン…「はい伊藤です」「饗庭ですが、ギックリ腰をやっちゃって明日いけません」「そうですが…残念です」バス会社、山小屋にキャンセルの電話をかけ8名で出発することに。梅雨の時期、雨具をしっかりザックにつめ、北岳の登山口・広河原に6時15分に到着しました。「左を見て、あれが北岳!」ぬける青空に日本第2位の標高を誇る北岳の雄姿がデーンと構えていました。出来立てほやほやの南アルプスビジターセンターで雄打ち(きじうち)お花摘み・朝食をして広河原7時発、雪解け水が川となって流れる上に掛けられた吊橋にユラユラと揺られ、広河原山荘に。「さあ登りです」と気合を入れ登山道にはいりました。広葉樹林の登山道はいっきに急登の連続です。時折り頬にふれる風は涼風、一瞬のクーラーです。約20分で大樺沢(おおかんばさわ)・白根御池小屋(しらねおいけこや)の分岐に出ました。当初は白根御池小屋コースをたどる予定でしたが、晴れたので展望、涼風が効く大樺沢コースを登ることにしました。ゴー、と流れる雪解け水は川となって中央に、ザー、と聞こえる雪解け水は右や左に沢水となって流れ、天然のクーラーで、温まった体を冷やしてくれます。30分歩いての休憩は、ほどよい川のほとりで行なわれ、オアシス。いろいろな飴やチョコで糖分補給、梅飴を口にしては塩分補給。背後には鳳凰三山が連なっています。川の両岸から山の稜線には、新緑、濃緑などで「山浸たる」の感。いや、まだ夏には早いので「山笑う」の感じでしょうか、とっても美しいのです。

登山道は川から離れ樹林帯を歩きます。所々には雪解け水が流れていて体を爽快(そうかい)にさせてくれます。歩いて2時間ほどのこと、「伊藤さんチョット」私を岡本さんが呼ぶのです「まさか?」と思いながら近づくと「もうここで下ります」という話の内容。たしかに足の運びが重く見えたので「まさか?」と思った

小屋着10時30分「何しようか」

「そんなに早く着いて何をやるの?」「会社では10時休みで、着いたらもう寝るの?」とこもごも口にします。「着いたら飲むだけさ」生ビールがちらほら見え隠れします。「着いたら生ビールが飲みたいね」と山ガール?の声。着いたら生ビールを飲むことに一致したようです。樹林をトラバース(横なりの道)して行くと、青い空と白い雲が水面に浮かぶ池が見えてきました、白根御池です。標高2700メートルの雲上に浮かぶ池は、まさに天上の楽園といったところ。池には可愛らしいオタマジャクシが泳ぎ、湖畔には残雪が輝いていました。「うあー綺麗」できたての白根御池小屋は雲上のオアシス、小屋の中は木の香りが漂い、廊下、階段の木目は新しく気分は清々(すがすが)しくなります。私たちの部屋は「ハクサンイチゲ」の個室。布団は真新しく今宵はぐっすり眠れそうです。(そう思っていたのですが)「ビール、ビール」小屋前のベンチを陣取りました。すると山小屋の若く可愛いお嬢さん(スタッフ)が「伊藤さん、岡本さんから、って連絡ありました。無事広河原に着いたそうです」「よかったー」と全員が安堵、「それから岡本さんから、生ビール6杯とジュース1本皆さんにお飲みくださいといわれています」と差し入れの配慮、お言葉に甘えてさっそく生ビール、ジュースで岡本さんの無事と、登頂の成功を祝って「乾杯!」カチンとジョッキを合わせる音。乾ききったノドにながれる冷えた麦水「うーまい」「幸わせー」一杯目のビールはこうして始まりました。時計は11時、消灯は20時、9時間という時間をどうやって過ごすのか、本を読む人、横になる人、語る人、飲み続けるノンバーなどさまざま、しかし誰もが「こうしてこんな素敵などころでゆったりすることに至福」を感じるとおっしゃっていました。トイレはなかに入ると自動的に灯りがつき、ウォシュレットでお尻は綺麗でしたが、魔の夜はただけありませんでした。夜空には満天の星が輝いているにもかかわらず、なぜか部屋のなかには雷の音、それも半端な音ではなくガアーン!ゴロゴロ。2日目は寝不足での早立ち、5時出発です。静まり返った湖畔を横に、ヘッドランプの明かりを頼りに「草滑り」の大急登に挑みました。はあ、はあ、吐く息は荒く、心ちゃんはバクバク。振り返るとお池はポツンと小さく、湖畔に張られたテントの灯りはうっすらと見えるようになりました。「まだこの急登はつづくの?」「もう少して終わり、あとは樹林帯に入ってつづら折りになるから、ガンバ!」気合を入れます。背後から陽の灯りが指してヘッドランプはザックの中に。周りの山や木々が赤く染まるころ、背後から太陽が現われてきました。ダケカンパの樹木に太陽は隠され木々の間からの御来光です。そんなころ、「キヤーツ」という鳴き声、日本猿です。「あつ、いたいた」10数頭のサルの群れ、標高約3千メートルの高さにいる野生の猿は日本だけです。「熊もこのあたりにいますか」「はいいますよ」私が3千メートルの山でクマと遭遇したのは、北アルプスの常念岳稜線、槍沢小屋の前。ヘビ同様にご対面は避けたいものです。「お願いしますだ山の神様、ヘビとクマだけには会わせないでくなんしょ」と祈りました。

次ページへ続く

草滑りのお花畑で昼食、空はガスリ、北岳の頂は雲の中。お花畑は赤や白、黄、紫の花々が咲きほころび、お花を愛でながらのゼイタクな朝食、美味しい。霧が忙しく流れる中をめざして登り、ジグザク道を進むと稜線にでました。風が強く、岩や石の中に咲く花々、北岳は高山植物の宝庫です。どこを見ても可愛らしい花々。眺望のきかない山でも花々が私たちを優しく包んでくれます。平坦地に赤や黄色のテントが見えるようになると、そこは3千メートル北岳肩の小屋。コーヒータムと洒落こみます。「晴れていたら素晴らしい景色が見られるのに残念」と小屋の主はいます。「あそこに甲斐駒、むこうに千丈ガ岳」と見えないうちに指差して創造を働かせます。「さあ、あと50分、がんばりましょう」重くなった腰を上げ出発。ここからは岩場の連続、スーッとガスが一瞬きれました、目の前に北岳の山頂が現われたのです。「穂高のジャンダルムみたいだね」と妻。



私たちが優先のため待機していた40歳くらいの男性5～6名のひとりが、「女子高生と思っていたら、よく見るとおばさんじゃないか」と話しています。我が遊友の佐藤、ダブル伊藤さんが女子高生に見えたといっているのです。正直言って驚きました。男性グループから離れてそのことをメンバーに話すと「最初でも、女子高生に見えたことは、服装や歩き方が若く見えたからです」と松浦さんはいう、(さすがは人の使い方がうまい)元女子高生は皆ニコニコ。この話は下山するまで話題(自慢話)になったことは当然です。そんなことを話しているうち3193メートルの北岳山頂に立ちました。「お疲れ様」と伊藤妻から握手。「会長ありがとう」と佐藤、伊藤(典)さんが寄りそってきます。目を合わすと、目から涙が噴き出すと思い、手を見ながらの握手。こんな握手はなんだやっても新鮮です。頂上は雲のなか、展望がなくてもここは日本列島で2番目に高い所、感動があって喜びはひとしお、感(かん)激(げき)。証拠写真、お菓子などで登頂を祝福して下山。下山ルートはお花畑に吸いこまれそうな道、白い花々が足元いっぱい埋め尽くし、黒沢明監督の映画「夢」のワンコマ、天国にいくときのシーン(花々に囲まれた天国への道)が、そこにはありました。

愛の岳、純白の花をもとめ

北岳山荘に予定通り10時45分着「また何をするの」。今回は何をするかは決まっていました。久保谷さんの提案「間ノ岳(あいのだけ)に行こう」でした。富士山は標高1位、北岳は2位、昨年登った奥穂高は3位、北岳の隣に位置する間ノ岳は4位。その話を聞いた佐藤・松浦・市川さんは「これでベスト4位全部に登れる」と勇んで出立、水、雨具など最低必要用具を持参して。

我ら伊藤3人はキタダケ草を観賞散策にぶらりとでかけることに。キタダケ草は氷河期の生き残り、世界にただひとつ、この北岳にしか咲きません、しかも山頂直下トラバース付近にしか咲かないというから貴重な植物です。花は純白、雪解けを待って咲きほころびます。しかしキタダケ草を見つけるのに苦労がいります。初めて見る人はなおさらのこと、せっかく見に行っても見つけることが出来なかった人は多いと聞きます。我が伊藤3人は見分け方を知り、翌日、強風の中で咲くキタダケ草の群落を妻たちが見つけ、感動したものでした。

小屋に帰って、テラスでウイスキーのお湯割りとお燗。下界は35度と夏日ですが、ここ北岳は気温15度で、お湯割り、お燗は体を温めてくれます。間ノ岳グループは行程時間1時間半以内に帰還してきました。さすがに早く驚きモノです。佐藤さんは毎朝2時間のトレーニングの効果でしょうか、女子高生よりも若く早く感じられます。間ノ岳頂上には若いカップルがいてうらやましかったのこと、「それは愛の岳」だからですよ。そんな言葉に誘発された市川さんが「愛の岳」の一編を語りはじめました。その話は開花することを願って、そっとしておきましょう。

北岳の夜は強風の音、時々雷注意報

北岳の夜は強風の音と昨夜に続いて雷の音がステレオになって、八本歯の部屋は揺れ動き、寝るのに大変苦勞させられたようです。朝食は5時です。小屋の古いスタッフは「気になる天気は朝、荒れ模様、風速20メートルですが、時々晴れるでしょう」とのことでした。身支度を終え6時に小屋を出ることにしました。ひとりの登山者が「風が強く前に進めなかった」と引き返してきました。この登山者は北岳を目指したに違いない、私たちは山沿いを通るトラバース道、強風はないと思って出発しました。最初は思ったように風はなく、安心して胸をなでおろしました。ところがキタダケ草が咲く付近に差し掛かったとき、突然風が吹きはじめ、前に進めません。雨もふりはじめたので、前進不可能と判断して小屋に引きかえすことにしました。そのときに10数名の団体ツアー登山者が登ってきました。見るとお年寄りの方が数名います。私たちの行動を見て不安な顔をしています。「こ

んな方を、こんなに風が強いのに、連れていくの」と私は大変心配になりました。ツアー登山の無謀ぶりに、あきれはてました。小屋に戻り、小屋スタッフに、天気図をネットでするように依頼しました。すると低気圧の中心は東北にあって、前線は南下中、等圧線がこみあっているのです。朝、小屋の古いスタッフが「時々晴れるでしょう」といったことは嘘っぱちで、天気図は、ますます荒れ模様になることを伝えていました。(登山客の受けよりも、安全を考えろと言いたい)

食堂に入り、皆さんに「天気はますます悪くなり、このままここに留まると、今日中に家に帰れなくなります。さきほどのツアー登山者が、1時間経過しても戻って来なかったら、八本歯(はっぽんば)のゴル(鞍部)の難所を越えたことになります。私たちはあの方より若く力があります。時間をかけ

てゆっくり進みましょう。風は吹き荒れますが、ほんの少し止むときがあります。それを狙って進みましょう」と話し、1時間後に直出することにしました。今から31年前、南アルプスの赤石岳から聖岳に行ったとき、台風に遭遇した経験が役立ちました。今日の風はあの時よりも弱く、雨もありません。メンバー全員を無事に広河原に下ろすことだけを考え、策を考えました。8時に小屋を出発しました。先ほどより風は弱まっていた。少し安心して矢先のことで。猛烈な風が私たちの行く手をさえぎったのです。

風速30メートルのなか「いまだそれっ行くぞ!」

大きな声で「岩にしがみついて!」といっても風の音で消され、声が届きません。ジュエチャーで風除けの方法、歩き方を伝えます。岩にしがみついても飛ばされるくらいの強風。少し風が弱まったと思って立った瞬間、谷側からの突風で転びました。風が山側から吹いていたなら全員は谷底へ、いっきに緊張が走ります。7人全員が強風のなか、身をかかめ、岩にしがみつ、風の弱まる瞬間を狙います。風の音に耳を澄まし、遠くの風が静かになった頃をみはらかって「今だ、それっ行くぞ!」と身をかかめ、次の岩場まで走ります。「なんだか戦場にいるみたいだね」と誰かがいますが、返す言葉(余裕)はありません。次の岩場、そして次の岩場までと、繰り返し小刻みに進みます。ザックカバー、帽子は飛ばされそうになり役立ちません。顔に吹き付ける風、経験した人のみぞ知る風の猛威。風は同じ風向きではなく巻き上げることも。ビュー、いっこうに収まらない風、それでも遊友の仲間は弱音ひとつ言わず、強風に立ちむかいます。伊藤妻、佐藤さんは私が、伊藤典子さんを松浦、市川さんがフォローし、しんがりは久保谷さんが担当して、一致協力、団結して風に立ちむかいました。その姿は美しく喜びを感じます。これなら強風をぐりぬける、と確信しました。まさにチームワークは最高です。1時間かかるコースを約20分オーバーして八本歯のゴルに到着しました。「やったー」「バンザイ」、難所を皆の協力で乗り越えた一瞬です。ここからは岩場に掛けられた梯子がつづきます。すると「風よ、ふけー」無風状態で蒸し暑いために、今度は風をもとめるなんて不思議です。梯子を下っている時です。右手がぬるりとなりました。ウンチです。臭い、ウエットティッシュでふき取りますが匂いが消えません。こんなところでウンチする奴は?と考えたら、先ほどの団体ツアー者の落し物でしょうか、あまりの緊張で、もれてしまったのでしょうか。皆さんは手袋していたので大丈夫だったようですが、これも先頭を歩く者のつらさです。今度は大雪渓のくだりです。メンバーをふた手に分けて、アイゼン装着して雪の中へ、シャキ、シャキ、かかとから雪に足をふみおろします。長い雪の下り、岩場と違って膝に優しい下りです。目の前に鳳凰三山が現われました。「ねー、ねー、雪を下っているところを写真に撮って」「大丈夫です、撮っています」と松浦さん、さすがです。

二股で、あんパン食べての昼食。周りの山は新緑、岩場に霧がかかり山水画の風景がありました。蟬の鳴き声、川の流れる音が聞こえてくると広河原はもうすぐです。広河原に着いたら皆さんと握手するとき、ウンチの付いた手では失礼と思い、水場に行って手を洗い、握手することになりました。

「お疲れ様」ひとりひとりと握手です。ストレッチで体力をつけた伊藤典子さん、穂高のときよりひとまわり大きく成長して元気でした。北岳に登るために朝5時に起き、1時間歩いて脚力を鍛えたユリ子妻、ますます山女(ガール)になっていくようで、山男として嬉しさを感じています。佐藤さよみさんは、遊友女性のなかでの元気印の代表です。私をフォローしてくれた松浦、市川さんに感謝。間ノ岳案内をしてくれた久保谷さん、ありがとう。天気には恵まれなかった山行でしたが、きっと今回の北岳山行は参加者ひとりひとりの心のなかに深く刻まれ、人生の思い出のひとつになることでしょう。私も本当に楽しい進軍登山でした。ありがとうございました。

強風(きょうふ) でも進めと言う 鬼の松(おにのみまつ)

お粗松

北岳、間ノ岳制覇

7月2日、広河原を8名で出発。途中雪渓、樹林帯を越え白根御池小屋を目指しました。3分の1?地点で一人自分の体調を考慮して勇気ある撤退をしました。白根御池小屋は南アルプス市営でまだ新しく大変素晴らしいところでした。余り早く小屋に着き午後には外のベンチで優雅にコーヒータム、昼ねを楽しみました。翌朝4時本懐の北岳を7名元気に目指しました。長い長い急な登り。猿の枝渡り、下からの涼しい風に癒され肩の小屋して小休止。時折ガスが山を隠したりしていましたが目を見張る沢山の高山植物に余り疲れは感じませんでした。8時半3193メートル北岳頂上に到達。なんせ、日本で第2位の高さです。息をこらし頑張った仲間との頂上での握手は絶対忘れることは無いでしょう。記念写真を撮り一気に北岳山荘に降りました。10時半小屋にてカップヌードルのランチ?を採り有志4名で間ノ岳にチャレンジしました。尾根が一番長い山だと会長が言っていたが途中、2回位眼下を見下ろすと足がすくむような絶壁がありました。でも、その先にはやはり感嘆の声をあげるほどの山野草の群落。3羽の雷鳥も見ることが出来ました。私は剣岳で雷鳥を見て以来でしたので大変感激でした。間ノ岳3189メートル。もう少し天気がよければここからの眺めも最高だったと思います。3日の夜からは強風で何度も夜中に目を覚まし

した。下山スタートは4日朝6時でしたが、出発はしたものの体が浮きほどの強い風で小屋にユーターン! 暫く様子を見て会長の判断の下再出発。8本歯のコルが難所と聞いていましたがそれ以前の岩場に身をかがめて強風をやりすごす怖さのほうが私には恐ろしかったです。とにかくみんなが安全にと時間をかけて下山しました。大雪渓をアイゼンを装着して降りる際にも上からの落石に配慮して慎重に歩を進めました。出発地点広河原着後2時半。こうして7名の特別山行も無事達成できました。経験豊富な会長の的確な判断に脱帽!そして若い2人の男性、ベテランのゲストさん、心を癒して下さったお二人さん、本当にありがとうございました。忘れることの無い最高の夏山でした。〈佐藤きよみ〉

北岳山行の皆様

楽しい北岳山行に同行させてもらいありがとうございました。ゲスト参加にもかかわらず、皆様から暖かく迎えてくださり感謝申し上げます。美味しい食べ物をたくさん頂戴しましてありがとうございました。梅雨時にもかかわらず雨は少しでしたが、風の強さには参りました。眺望は出来ませんでしたが、キタダケ草や雷鳥が見られたり、雪渓を歩くことが出来たり、思い出多い登山でした。これからは、遊友の会員として皆様と同行させてもらいますので、よろしくお願いいたします。

〈久保谷 実〉



りの昼前に着いてしまいました。岡本さんから差し入れのビールが、喉に一直線に入って元気を取り戻しました。カレーライスとみそ汁、そしてなんといっても樺正宗のおいしかったこと。

申し分のない山小屋でなぜか、寝不足のまま、典子さんの痛いマッサージがとても心地よく疲れも吹っ飛んだ感じでした。普段言えない愚痴をきいてくれたきよみさん、いつも元気をもらって、励まされました。お二人に足を向けて眠れません。本当にありがとうございました。

2日目の草すべりには閉口!元気を取り戻したはずの体が重く、足がいうことをきいてくれない!「もう30分たっただけですけどー」

追いつくと歩き出してもうー!なんて何回思ったことか?鼻水と格闘しながら松浦さんと市川さんの若い感性に耳がダンボになって、日本を担う二人に出会えてよかった!頼もしいなあって、正直羨ましく思いました。

高山植物の宝庫...キンボウゲやイワカガミやキバナシャクナゲなど色とりどりのお花畑に迎えられ、また岩の間から咲く小花に生きる力強さを教えられ、肩の小屋からひと踏ん張り、待望の北岳山頂に着いたときには、熱いものが込み上げてきました。やったー!み

んなで握手!記念撮影をして北岳山荘へ。自分にご褒美の記念バッジをゲット。有志4人を間ノ岳に送り、私たち3人は白い清楚なキタダケソウとの出会いを求めて散策。なんと保護ロープで囲いがしてある中に少しだけ。葉に特徴があることを発見、同じような白い花の中でけなげに咲いていて、だれかみたい...かわいい!。晴れていたら絶景だよ、と言われたが、流れる雲や雄大な山々に心が洗われるようでこの大自然の中に溶け込んでいる自分が不思議と心地よかったです。

翌日の強風と雨の中2度目の出発に不安を覚えながら、仲間を信じてみんなで一丸となって突き進む八本歯のコルまでの時間は、一生忘れられない経験となりました。一番重い私が15Kg位あったでしょう?荷物の分をたしても立ち上げると吹き飛ばされそうになり、風のゆるんだ一瞬を逃さず、今だー!行くぞ!の声に必死でついていきました。登山の経験豊かな久保谷さんの的確な助言、みんなをまとめ、命を預かるリーダーの安全な判断の御蔭で全員無事に下山できたときには胸を撫で下ろしました。雪渓で転びそうになりながら、また証拠写真をパチリ。

怠け者の私が、本当にみなさんに励まされ、守られて、日本第2位の北岳に登ることができました。心から感謝します。ありがとうございました。

だいふ昔の女子高生より

〈伊藤ユリ子〉

だいふ昔の女子高生

遅ればせながら、夫の、留守にお邪魔して一言お礼をと思い、登場します。

世界中どこを探してもここにしかない高山植物を見せたいからと以前から誘われていた北岳。私にも登れるのかしら?と不安もありましたが、時間をかければ誰でも登れる!言われ、その言葉を信じて挑戦してみよう!と参加しました。山のベテランに混じって思いリュックをヨイショと持ち上げて広河原から遠くの北岳を目指しました。

さて、最初はルンルンで歩き出した私でしたが、肩に食い込む重みが一層重く感じ始めたころ、大樺沢二俣あたりで岡本さんのまさかのリターンえっ!何?状況を察知する前にバイバイ!私の方が心臓バクバクなのにー!急に不安がいっぱい。でも新緑の美しさと可憐な花々にはげまされ、がんばりました。いい汗をかきながら、30分歩いて休憩、のリズムで一番遅い私に合わせていただいて、白根御池小屋に予定通

北岳山行記

3.11の震災から早4ヶ月経とうとしている。今年は山は諦めよう、いや山へ行ってる場合ではない。退会も考えた。岩手から帰って新聞を片っ端から読んだ。近くに住む長女一家が液状化の影響で我が家に非難して新聞など読んでいる暇などなかった。倒れ掛かった電信柱、傾いた家、瘤状に歪んだ路面、見ていると頭がクラクラする。だんだん力が抜けてまるで魂が抜き取られた感じになってしまった。そうこうしている内に7月の山行が近づいてくる。返事をしなければならぬ。どうにも力が入らず北岳は無理だ。同郷の会長から「気分転換になるかもしれないから北岳に行きましょう」とのメールを頂いた。何かをしなければ前に進めない。思い切って行ってみようか…会長に決断のメールを入れた。それから毎日いつものコース1時間半のウォーキングと両手に4キロづつの鉄アレーで筋トレに励んだ。1ヵ月後、いよいよ北岳に向かう。

7/1 夜の新宿、煌びやかなネオン、被災地では考えられない。若者たちが集まっている。これから何処に行くのだろう。皆華やかである。こうでなければいけないのだ。当たり前の事、普通であるべき事がいかに幸せな事なのか。夜行バスで山梨に向かう。途中白根天笑閣にて仮眠。あまり眠れない。

7/2早朝乗り合いバスで広河原へ。目の前に北岳が聳えている。7:00白根御池小屋に向かう。途中休憩を入れて大樺沢をひたすら登る。雪解けの清流が勢いよく流れている。マイナスイオンの深呼吸、とても気持ちいい。この辺はまだ新緑で素晴らしい森だ。岡本さん体調不良が引き返す。残念。二俣から白根御池小屋に向かい予定より早く到着。まずはホッとする。岡本さんの心遣いの冷たい飲み物で乾杯!新しい小屋でとても素敵なスタッフの方々が親切で気持ちのいい人たちでした。昼食は外のテーブルで味噌汁付のカレーを頂きました。午後は近くを散歩したり写真を撮ったり仮眠したり。5時の夕食は山小屋の食事とは思えない箱入り弁当でこれまた素晴らしい食事でした。



7/3 4:00出発ヘッドランプを付けて草すべりの急登を登る。おそらく心拍数最大値を表しているだろう。次にダウンするのは私かも…牛歩で一步一步前進。途中日の出を見る。樹林帯を抜け小屋で作って頂いた弁当を朝食に、完食。あたり一面キンボウゲなど高山植物の絨毯に感激!尾根ぐいに肩ノ小屋で休憩し北岳山頂を目指す。やっと登頂、三角点にタッチし皆で握手。涙がこみ上げて来た。ありがとう!みんな、ありがとう!!皆のお陰で登頂できました。力が湧いてきました。感謝です!視界が悪かったが雲海の上で暫し休憩し北岳山荘を目指す。傾斜のきつい岸壁でしたが一面のお花の絨毯に心癒されました。小屋に到着した時は胸を撫で下ろしました。部屋に案内され荷物を降ろすや否や、元気組は間ノ岳へ向かった。私とユリ子さんは会長の案内でキタダケソウを見に行った。白くて可憐な花でした。世界にこの場所にしかないと言う。こんな高山にじっと耐えて咲いている姿に勇気が湧いて来た。頑張ろう!キタダケソウに勇気をもらいました。

7/4 夜半から風雨が強く窓ガラスを叩きつけていた。低気圧が通過中。今日はとても無理ではないか。リーダーに従い小屋を出発したが強風で引き返す。1時間後再び小屋を後にする。風除けに市川さんと松浦さんにサンドされ本当に心強かった。危険な八本歯のコルも一步一步無事クリア。広河原の道しるべに従いアイゼンを着け雪渓を下りて来た。無事広河原に到着。皆で握手した時は感無量で熱いものが込み上げて来た。着替えて乗り

合いタクシーで甲府駅へ。駅ビルの軒屋でうどんを食べスーパーあずさに乗り込み一安心。皆の疲れは何処へやら。話が盛り上がり明るい内に新越谷着。せんげん台、春日部で皆と挨拶を交わし一人になってしまった。車中この四日間を振り返って見た。楽しかった。そして勇気付けられた。抜けてしまった魂を取り戻したと思う。これで前へ進める気がする。きっと大丈夫!震えていた体はもう大丈夫!

今回の山行は私にとって生きて行く勇気をもらいました。そしてその機会を与えて下さった伊藤会長に感謝すると共に同行された遊友の仲間、特に市川さん、松浦さんには命を守って頂き感謝いたします。若い二人に守られとても心強かったです。久保谷さんにはいつも笑顔で最後尾から声を掛けて下さり安心しました。明日から人生再スタートが切れそうです。そして週末には再び岩手に行って来ます。

「あなたが一緒にそばで寝てくれたから、夕べはぐっすり眠れたよ」と言ってくれた88才の母のそばでまた一緒に寝て来ようと思います。

ムードメーカーのきよみ様、元気をありがとうございました。

ユリ子様、来年は私たちが主役かも知れません。大変お世話になりました。

「北岳、バンザイ!!」 <伊藤典子>



8月の山行案内 雄大な高原・美ヶ原を歩こう

日本を代表する広やかな高原台地、車利用で簡単に行けませんが歩いてこそその実感に接し夏の花々の風情と北アルプスの峻峰を背景に雄大な展望を楽しもう。

遊友コース:天狗の露地駐車場→王が鼻→王が頭→塩くれ場→美しの塔(合流)→(牛伏山)→山本小屋(合流) 楽々コース組みはバスで回り込み、美ノ塔、などらかな草原散策などができます。

日時: 8月7日(日)

集合: せんげん台=5:45 春日部=6:00

持ち物: 昼食・雨具・適宜山用具・着替え(風呂は未定)

申込み: 7月24日(日)21時まで(山行2週間まえ締め切り)

藤井一義へ TEL: 048-977-8229 携帯 090-9108-0922

御注意: エントリー済みの方は申し込みの必要ありませんが、キャンセルの方は早めに連絡をしてください。7月17日現在エントリー21名(定員25名予定です)上記締め切り日の7/24以降は基本キャンセル料が発生します。定員に満たない場合のキャンセル待ち受け付けは7月31日(1週間前)です。

